

現代フランス人の死生観 ——多様な現象に則して

熊 沢 一 衛

I]

この小論では現代フランス人の死生観を、社会的な事件や出来事を知り得た限りで多角的かつ客観的にまず記述して、その背後にある原因・理由に言及することで浮き上がらせたい。われわれ日本人が現在直面している生と死の問題にも関わることも多くあって、何らかの示唆を与えられると幸いであるが、しかし、むやみに比較していくことは、評論ではないので控えたい。

あらかじめ次の2点に関して定義づけをしておきたい。まず、タイトルの「現代」というのは何ら厳密な学問的な区分ではなく、大ざっぱにいつてフランスの戦後——1945年から現在（2004年8月）までの期間を指す。さらに今回の小論の扱う出来事の起こった時期に関していえば、この「現代」はさらに狭められ、1980年以降から今までの約20年間が中心となる。時間的に見て、著者としては拙稿「現代の *ars moriendi*——モーロワとモーラン」^(注①)の続編という位置づけをしている。

第2の定義に関わるのは、「フランス人」とは一体、誰れを指しているのかの問題である。よく知られているように現在、フランスには400万から500万人の移民がいるとされる。この数字のあいまいさ自体がすでに事からのむずかしさを示しているがここではこの点は問わないことにする。むしろ、死生観は宗教と密接な関係をもつものであるから、特にイスラム系移民がフランス国籍を取得した場合の「フランス人」を考察の対象として

ここで入れるのかどうか差し迫った問題となってくる。

結論としては、この小論ではこうしたフランス人——移民から国籍を取得したケース——は除外する。これは何ら他意はなく、イスラムの信仰をもつ人々の生と死の思想は別途考えるべき大きな問題であり、事がらをすっきりさせるということから判断したのである。もちろん、すでに統計の数値（例えば、あなたの宗教は？——イスラム教2%）を利用していく場合はこれとはまた別の問題となつて区別がむずかしくなる^②。

余談となるが、『移民と現代フランス』という問題作を著したジョリヴェ氏は、フランス人となった移民たちの苦労をレポート風にしてうまくまとめている。しかし、意外にもその第二章で「フランス人は人種差別主義者か」というタイトルを掲げ、このときのフランス人については何の定義も、またこうした問題意識のことも書いていない^③。多分、この場合も、移民系を除いた、普通常識的という昔から居るフランス人のことを指しているのであろう。

さて今回の小論の「方法」について述べておこう。まず新聞・テレビ等のメディアを賑わせたニュース（もちろん、生と死に深くかわるもの）をまず取り上げその概要を振り返る。次にそのニュースの背景を調べて、フランス人の生と死についての意識が表面化してくるよう努める。さらにそれらでも不十分である場合、つまりさらにその背後にあるであろう根本原因——宗教意識——については次回以降にまわす。そのために今回は、副タイトルに「多様な現象に則して」と付加したのである。

Ⅱ]

死について語ることがいつの間にかタブー化してしまっている、とよく言われるようになって久しい。このことについては今や多くの人々が指摘しているので、もうタブー化しているとは言えないかも知れない。しかし、このタブーを「意識して」打ち破っていった人々のことは思い出しておくことが必要である。

木村尚三郎氏の伝えるエピソードは興味深い出来事である。1975年の中世史学会のテーマは「中世における死」であった。その開会式の冒頭のあいさつのなかで歴史家のピエール・ショーニュは「われわれは死なねばならぬことを忘れていた」と述べたそうである^④。参加者たちも意表をつかれたことであろう。

木村氏の説明によれば、この1970年代後半において文明は成熟期に入り、世界が低成長時代になった。未来に向かって大きな期待と確信が抱けなくなったことと、死の問題が再びクローズアップされたことの間には密接な関係があると、氏は分析する^⑤。これが適切な指摘であることは、この時期あたりから、フランスで沢山の死と死生観に関する研究が刊行されだしていることを見ても理解できる^⑥。

そのうちでも特に、現代の「死のタブー化」を早く指摘して、西欧の精神史研究においても新しい分野を確立した歴史家、しかも大学教授ではなく「日曜歴史家」であった、フィリップ・アリエス (1914～1984) のことはどうしても紹介しておかなければならない。晩年における大作『死を前にした人間』は1977年にフランスで刊行された。(邦訳は1990年に、みすず書房から出た。) この時期は先のショーニュの発言と合わせて考えてみるとさらに興味深くなってくる。

しかし本論文では、アリエスが死の研究に取り組みはじめた初期の頃の小さな報告文である「今日のフランス人における生と死」の方が大変含蓄があるので、ここで取り上げてみることにする^⑦。この中でまず、アリエスは「死者の日」 *jour des Morts* が西欧で意外にも余り知られていないことをアメリカ人の来訪 (1950年) を機に本人も知らされたことを書いている。「死者の日」は「万霊節」であり11月2日である。「万聖節」 *Toussaint* は11月1日であり、実はその翌日にあたる。しかしこの2つは混同されて、実際には11月1日にフランス人の多くは菊の花をもって墓参している。

2つ目の指摘として、死者と葬儀の関係をめぐる変化に注目しているところが興味深い。

彼によれば、1930年代までは「死は大きな公開の儀式で、死者が主宰していた」が今日（1970年頃か）ではこの関係が逆転してしまっている。主体は死者から親族の方に移っていった。「死者の日常生活の外への排斥」がはじまっていったと言うのである^⑧。アリエスの母の死（1964年）の時は、人々は亡き母の運命に対して同情して「お悔み」を述べ、自分にも死者を悼むことばをかけてくれた。しかし、父の死（1977年）に際しては、人々はもうお悔みを述べず、死と死による悲嘆を語ることを「恥ずべきこと」とするようになったと、微妙な人々の心情変化を自分の体験から記述している。

さて、この1964年から1977年にかけて人々の心の中で起った変化の原因はなにであろうか。アリエス自身はこの点については触れていない。木村氏の前述の推論は一般的すぎてこのような変化を解明するには役立たない。

われわれとしてはこの問いに対して次の2つの「事件」を「変化の原因」についての仮説として掲げたい。第1は1968年の「五月革命」であり、第2は、1967年のクリスチャン・バーナードによる心臓移植手術の成功である。

「五月革命」は現代フランス社会のすみずみまで変革をもたらしたため、事あるごとに原因として持ち出され、迷惑しているかも知れない。しかしここでは、1962年から2002年の40年間を概観した「ル・モンド」の秀れた記事^⑨を思い出しておこう。若者と大衆の文化が、アルジェリア戦争を処理したあと出現した。（エビアン協定）フランス人が、買いやすくなった車、ルノー8を買って地中海へのバカンスを楽しみ出した姿をいきいきとこの記事は描き出している。こうした現世の享楽を追求し出していく姿勢が先のアリエスの指摘した変化の背後にあるのではないかと思うのである。1968年5月の事件はこうした変化がピークに達したときのシンボリック存在とも言える。

心臓移植手術については、このときの被移植者は18日間生存しただけで

あったが、その後、拒否反応を防ぐ有効な薬が発明されて世界的な「移植」の時代に入っていったことを考えると重要なでき事であった。ちなみに最近の報告では心臓移植の手術に限っても毎年3000～4000件行なわれている。医学上の技術の進歩は人々の死に対する態度^⑩を変えるであろうし、死生観に与える影響は無視できないと思われる。人々は死の儀式を通しての「悲嘆の克服」を思うよりは、即物的・散文的になるのではないだろうか。今日では、死の意味を考えさせる、内容を併った「儀式」の復権こそが大切である。部品を代えて高速道路を走り続けるトラックと人間は同じではないからである。

Ⅲ]

サルトルの死は1980年であり、彼の標榜してきた無神論的実存主義の立場ゆえに、この小論の方法によってまずは取り上げる価値がある死である。現代フランスにおいては、キリスト教離れが著しく進んでいることを考えると、神なしで生きぬいていく倫理を求め続けた彼の存在は、今日の若者たちの「無宗教」と比較していく上でも参考になろう。もちろん、サルトルの無神論 *athéisme* と若者たちの無宗教 *sans religion* とは類似しているが同質ではないことは一目瞭然である。この点については次稿で考察する予定である。

さて、サルトルの死生観については、松浪信三郎氏が簡潔に記述してくれているので、それをさらに要約して以下に記しておこう^⑪。

サルトルは9才のときにごく自然に無神論を取り入れるようになった。それ以後、人間の存在を「即自」であると同時に「対自」な存在としてとらえ、未来に向かって自己を投企して形成していくものとしてとらえる哲学を構想した。しかし、死はこの企てを挫折させた。「人間は一つの無益な受難である。」(*L'homme est une passion inutile*)^⑫という死観が出てくると氏は述べている。

しかし、これではこの哲人は、ごく自然と無神論者となり、即自かつ対

自存在として生きぬいて最後には、無益な受難者となってしまう、いわばバカげた人間となってしまう恐れがある。サルトルの内面にはもう少し厳しい闘いがあったはずである、ストイシズムの伝統を継承する倫理を冷戦という、東西対立の歴史の中で打ち立てようとした情熱があったであろう。次の証言を聞いてみよう。

「私は、神と血みどろになって戦っているという意味で、atheistである。自分が血みどろになって戦っている相手がいないなどというバカはいない。」^⑬

この証言にはフランスの精神風土の中では、無神論者athéeというはっきりした立場を表明することがきびしかった時代の一端が見える。彼は、成功しなかったとはいえ、キリスト教とは別の新しい倫理を打ち立てようと葛藤していたし、これは決して無益な試みでなかったと思えるものである。

次にサルトルの死のニュースのもつもう1つの意義について述べてみよう。それは、遺言によって「火葬」としたことである。一般に、キリスト教徒は火葬を嫌うことはよく知られている。それは、キリスト教の「復活への信仰」を否定することにつながるからである。再び先程の松浪氏の記述のなかから葬儀の様子を追ってみよう。

「1980年4月15日、パリ・ブリッセ病院で肺水腫（エデム・ピュルモネール）の為死去した。葬儀は4月19日に行なわれた。葬儀といっても、教会による式典などは一切なく、葬儀を執行する代表団もなかった。ブリッセ病院を出発した霊柩車は、（……）モンパルナス墓地の正門へ向かった。（……）遺体はモンパルナス墓地の仮埋葬所に安置された。遺体は23日、パール・ラシェーズ墓地にあるパリ唯一の火葬場で荼毘に付されたのち、ふたたびモンパルナスの墓地にもどり、生前の居室から見おろせるほどのところにある墓地の外壁の近くに埋葬された。火葬はたぶんサルトルの遺言によるものであろう。」^⑭

現在でもパリという大都会の火葬場はこのペール・ラシェーズ墓地内に一つあるのみである。この火葬場については後述する。

ここで「復活」と「復活の体」についてまとめておくことは無駄ではなからう。原点にあるのはまず『コリント書』15章である。

「死者の復活がなければ、キリストも復活しなかったはずです。そしてキリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宗教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。」と聖パウロは語る^⑮。

この強い復活信仰に比較して、実際に復活したときの、「復活の体」については意外と余り常識化されていないように思える。この世での体のままではないはずである。では一体どんな体であるか。『キリスト教大事典』によると、「復活の体が新しい秩序に属する〈霊〉の体であるという神学者は多い。」と説明されるにとどまる^⑯。これは同じく『コリント書』15章の42で、「自然の命の体が蒔かれて霊の体が復活するのです。自然の命の体があるのですから霊の体もあるわけです。」と述べられているのを多少言いかえたもので^⑰、神学者たちもこの「復活の体」については多弁ではない。普通の信者にとっては、火葬によって「自然の体」から「霊の体」につながる道が具体的にどのようなになっていようと、それがたち切られてしまうという恐れや不安をもつのであろう。さらに、今のままの体そのままよみがえと考えている人もいることであろう。信仰とはそういうものであって当然の不安であり恐怖だといわねばならない。一方では、キリスト教徒であっても、復活だけは信じられない人もいるし、科学と合理主義の現代社会では不信仰の者で、復活も当然信じない人も多い。

次にパリで唯一とされるペール・ラシェーズ墓地の火葬場 (crématorium) についてインターネット上のページを覗いてみることにする^⑱。

まず「葬儀の様式」は故人の意志またはその家族の意志が尊重されると記している。その上で、3つの様式のあること、すなわち、埋葬 (inhumation) と火葬 (crémation という用語が incinération より好ましいという注である) と献体 (don du corps) とがある。最後の様式は、臓器提供 (don

d'organes) と混合しないようにと注意書きまでされている。火葬は革命期に認められたが、その後、宗教上の反動があって禁止されてきた。1870年代はじめより、反教権思想の広がりに合わせて、徐々に火葬を含めて葬儀の様式の自由が宣伝されて、1887年11月15日の法令によって火葬が法律上も認められた。パール・ラシェーズ墓地内の火葬場の建造されたのも丁度その頃である^{※絵図1}。

さらに火葬は埋葬ほどには知られていないが徐々に増加傾向にあって、パリの死者のうち25%が選ぶと記している。火葬は必ず棺 (cercueil) に入れて、パリ市役所の委託を受けた葬儀社が執行する。また、パリ警視総監の許可が必要なこと、死後24時間たってから6日間の間に行なわれるべきこと、遺骨の扱い方には、埋葬、骨つぼ預り所、散骨の道があるが、家庭におくことは、「悲嘆の仕事」(travail de deuil) をむずかしくするので推奨できないとまで書かれている。役所の案内用ホームページの類いの文章のなかに、「悲嘆の仕事」ということばを発見したとき、筆者はフランスを含めて、欧米でいかに「悲嘆の教育」が進歩して定着しているかを実感して感心した¹⁹。

Ⅳ]

2003年の夏の猛暑 (la canicule) によってフランスでは、老人を中心に14802人 (公式発表) の死者が出た。異常気象のせいばかりでなく、人災の面があったことが指摘されている。

パリでは当初、300名あまりの遺体が引きとり手がなく、引きとりの期限を延長してもなお引きとり手が現われなかった。当局は、やむを得ず、死者たちをパリ郊外のティエ墓地 (cimetière de Thiais) 内にある貧困者用の墓地区界に埋葬した²⁰。何体かの遺体は猛暑をさけて、ランジスの中央市場の冷凍庫を借りて預けられた。遺体を冷凍庫に一時的にしる収めるという発想とそのテレビの映像とは日本人の感性とフランス人の感性との間に差があることを強く感じさせた。

さて約1年がたって、2004年7月26日の「Le Parisien」紙は、この1年間にフランス政府関係者のとってきた対策を報告し、また事件の総括もしている^{②1}。この記事によると、事件の原因を次の2点にしぼっている。つまり老人の孤立と空調設備の不備である。対策は当然この原因を中心にとられた。一人ぐらしの老人と病院との連絡の緊密化（1分15サンチムと低料金の通話料）と病院の冷房設備の改善（58%から76%が空調室をもつようになった）を行ったそうである。

問題は、老人の孤立化の背後にあるもの——老人の孤独——はフランス人の個人主義的生き方の行きつくところと関係があるので、政治や行政の策によって癒やされることはないであろうという点にある。このことについても、次稿で現代フランス人の〈宗教心〉を扱う際にもう一度触れるつもりである。

次に、老人の死のニュースと関連の深い問題を3つの象徴的ニュースを通して考えてみよう。

第一のニュースは、1998年7月8日、パリの西郊外イヴリヌ県で、若い看護婦が約30人の末期患者を「家族の要請」を受けて安楽死させた事件である。クリスティーヌ・マレーブル容疑者（28才）が司法当局の取り調べを受けていたことが明らかになった7月25日以降、フランスのメディア（Le Monde も7月26日～27日号で）はもちろんのこと、日本のメディアも大きくこの事件を報道した^{②2}。

しかしフランスのメディアの報道で、注目されるのは、当時の厚生大臣ベルナール・クシュネール（Bernard Kouchner）氏がLe Monde のインタビューに答える中で次のように発言していることである。

「この看護婦を孤立化させてはならない。（……）いかなるはやまった道徳的判断もしないように気をつけよう。」^{②3}

同大臣は、同年9月よりさまざまな法律の整備に取り組み、なによりも大切な「緩和医療」（soins palliatifs）のための予算づくりに取り組む姿勢を

示した。(1億フランの補正予算をこの為にのみ組む)「国境なき医師団」MSFの創設者の1人でもあるこの大臣は、自分も今までに何人も安楽死させている体験をもっていることをのちに告白しており、他人事ではない気持が強かったのであろう。

なお、マレーブル元看護婦はヴェルサイユ裁判所につづいてパリ重罪院(cour d'assises de Paris)でも有罪判決をうけ、12年の禁固刑が確定した。(フランスは2審制)「家族の要請」「患者の要請」を受けて行った行為であったかどうかの点で、被告の主張が原告側の証人の「証言」の前に崩れていったのが有罪のきめ手となったもようである²⁴⁾

第2のニュースは元消防士ヴァンサン・ユーベール氏(21才)に関するもので、これはより深刻な「安楽死」の問題をフランス社会につきつけた。

19才の時、彼は交通事故から四肢麻痺、記憶喪失となり、口もきけず盲目同然の状態で胃ゾンデで栄養補給を受けて生きてきていた。「死ぬ権利」を手のかすかな動きから伝えて、著作にし、彼の死にたいという意志の訴えはシラク大統領夫妻にまで伝わっていた。

2003年9月24日、母親はついに本人の希望を入れてバルビタール(bartitrique)を点滴に混入させた。あらゆる希望を失ったうえ、身動きができずに自ら命をたつことさえできなかった青年は2日後に死んだ。司法当局も、この母親を調べたが拘束はしなかった²⁵⁾。オランダは「30年かけて安楽死のできる国」²⁶⁾となったが、フランスはこの事件をきっかけにどういう対応をしていくのであろうか。

第3のニュースは、2002年12月6日、ジョスパン元首相の母が「自殺」したことである。自殺は自死とも多少違って受けとめられるが、彼女の場合は、遺書から判断して、安楽死とも違い、「尊厳死」と考えるのが最も本人の意志にそった受けとめ方であろう。

左翼系の日刊紙「リベラシオン」は、客観的な事実のみを載せてこの

事件への判断をさし控えている様子である。

「助産婦でロベール・ジョスパンの未亡人ミレーユ・ジョスパン・ダンリュは、フランス尊厳死協会の後援会員でもあったが、2002年12月6日、92才で肅然とこの世を去る決心をした。」²⁷

「ル・モンド」の記事には遺書が全文掲載されていて、より共感を込めて書かれている。遺書を次に拙訳してみる。

「92才、健康が損われた状態が私のなかに腰をすえてしまう前に旅立つときがきました。私は安らかな気持でこの世を去っていきます。家族のもとを去っていくのは、それは悲しくはあります。年長のものも年少のももみんな私の親しい友なのですから。でもこれも物ごとの順番というものでしょう。

私は夫にも子供たちにも恵まれました。私は厳密な意味では信仰をもつものではありませんが、いつもこう繰り返してきたものです、ありがとうございます、この世のすばらしさに感謝いたしております、と。私は後になってこの死のヴェールの片すみをもち上げて、人類が今よりも賢くなっているかどうか、あるいはまたお互いに殺し合うことをやめたかどうかを見たいと思います。

私は花が大変好きでした。夫と子供たちは花がいつでも私のお供をしてくれるように気を配ってくれました。結婚当初は、夫がきんせんかの小さな花束を、今は子供たちがすばらしいバラやアジサイやランを贈ってくれます。花は私に存在の鏡になってくれます。つぼみからやがて開花しそして萎れていくのです。人の生も、多少は長い間にわたって変化していきますが、その根本は変らないもので花と同じ生命の姿そのものです。」²⁸ タイプ印刷でこう書いたあと手書きで2行次のようにもつけ加えられている、と記者は紹介している。

「肉体の安らぎを求めて闘っているすべての人々に感謝致します。」²⁹

生涯、助産婦として働き、2001年にはこの職業の社会的地位の改善のためにデモにも参加、前述の厚生大臣クシュネール氏とは、「誕生の家」構想

——医学的、技術的な設備のみでない何か——を目指して話し合ったりしていた夫人であった。

フランスの尊厳死協会（ADMD）は作家のミッシェル・ランダ氏が「ル・モンド」紙に寄稿した記事『1つの権利』（'79.11.19）がもとになって、1980年に創設された。現在はアンリ・カイラヴェ会長に引き継がれ20000人の会員をもっている^⑩。世界的には、1981年のリスボン宣言で、「尊厳死」（mourir dans la dignité）ということばが正式に使用されはじめる。安楽死と共通点があるため、しばしば混合されるので、最後に田代俊孝氏（仏教の研究とビハーラ運動を展開中）の文を引用してこの段落Ⅳ〕を終わりにしたい。

「安楽死と尊厳死はともに末期状態にある患者に対する治療行為の限界を問うということで共通点をもつ。（……）安楽死は肉体的苦痛の除去を目的として死に至らしめるものであり、尊厳死は苦痛はないが、回復の見込みのない患者における延命という形の生命操作の拒否と、臨終における人格の尊厳を目的とするものである。」^⑪日本の新聞は、ミレーユさんの死が「安楽死論争」を盛り上げたと報道している^⑫。

V]

1993年5月1日、ピエール・ベレゴヴォワ（Pierre Bérégovoy）氏が突然ピストル自殺をした。つい2ヶ月前までは首相のポストにあってミッテラン大統領のよき相談相手であった人である。鉄道員から政治の世界に入り頑強な体躯の政治家の姿からは信じられない行為であり、フランス社会のみならず、われわれフランスに関心を寄せる日本人にもショックを与えた。一体、何が彼の身に起ったのか、自殺のケースがほとんどそうであるように今もって不明である。

ミッテラン大統領によれば「犬ども」（ジャーナリストたち）に殺されてしまったのである。（lâché aux chiens）不審な点が多く残っていることか

ら調査を続けてきた人は他殺説を10年後（2003.5.1）に刊行した書物で主張している。常識的には、同年3月の総選挙における社会党の敗北と金銭スキャンダルにまき込まれて、「うつ状態」に落ち入り自ら命を断ったものと思われる。彼の側近の多くがそう証言もしている。

この事件をきっかけにして、筆者が考察しようとしていることは、フランス人における自殺（suicide）である。

フランス人の宗教意識については次稿の中心議題とする予定であるが、最近の調査（2003）によると、カトリック教徒と自認する者は、62%であり、戦後一貫して減少傾向にある。年令が高くなる程、この率は増加するとはいえ³³、こうした信仰心の低下も自殺に大いに関連するものと思われる。

周知のように、カトリック教会はアウグスチヌスの神学を取り入れ、「理由の如何によらず、自殺は絶対に禁止」としており、これは現在にまで到っていると、自殺学の第一人者、布施豊正氏は述べている。さらに氏は、18世紀の「啓蒙期」には合理的思考が人間の社会生活にも及び、特にフランス革命期には「自殺禁止法」を撤廃したと記している³⁴。

200年後の今日では、西欧を中心に広がった「EXIT」（出口）運動——いかに死ぬか——のせいもあって、ついにフランスでは『自殺の方法』（Le suicide : la mode d'emploi）という本まで出版された（1981年）。もちろん、このような本を好ましからざる著作としている人々も多いのは事実である。

さて、今日の教会は自殺をどう考えているのだろうか。先程の『キリスト教大事典』を見ることにする。

「現代のカトリック教会は教会法によって自殺者の埋葬を禁じているが、引責能力の有無が疑問のような場合には例外とする。プロテスタント教会も自殺に対しては否定的であるが、現代では葬儀を拒否することは稀である。」³⁵

故ベレゴヴォワ氏はミッテラン大統領や与野党の大物政治家の弔辞をも

らって葬儀をいとなまれたことは明瞭であるが、それがどの形式（宗教的か非宗教的か）であったかは残念ながら筆者には不明である。

最後に、現代フランス人の自殺数と自殺率（人口10万人に対する数値で示す）について調べておこう。

社会学者ルイ・ショヴェルによると、戦後のいわゆる「栄光の30年間」（1945～1975. J. フーラスチェの名著からとられた名称）は自殺率は24前後、であった。それが石油ショックをきっかけとしておとずれた経済危機より増加しつづけて、1977年から1985年の間に42%も増加した。失業率と自殺率の変動の間には否定することのできない関連がある*^{絵図238}。ちなみに、WHO の報告によると、1999年には、自殺率はフランスが26.1で、日本は36.5と、両国において安定と上昇の相反する傾向の差が見られる³⁷。

2003年2月6日の「パリジャン」紙は「自殺予防の日」であることもあって、「予防」には自殺しようとする者からのサインを見落とさぬことが大切だと説いている。この記事には、1998年には165000件の自殺未遂があり、10534人が「成功」したという数字も上げている³⁸。1998年より3万人を越える自殺者を出し、自殺率もはるかに30を越えている日本と、自殺率を20台にもどしてきているフランスとを比較し、経済危機と信仰との関連をも調べて、さらに自殺者を減らす努力に役立つような提言をしたいが、筆者はそれには余りにも無力である。今回は事実を報告するのみで終えたい³⁹。

注

① 「現代の *ars moriendi*——モーロワとモーラン」（名古屋大学言語文化部・国際言語文化研究科言語文化論集 XX 巻 第2号、1999）pp. 51－63.

② A. R. M. 122号、15 mai 1994.

この雑誌にはフランス人と信仰についての1994年における世論調査が載っている。この調査は無作為に抽出された人を対象として行なわれた。p. 38の質問4E（フランス人の宗教）で、カトリック67%、イスラム2%、無宗教23%という数字が記載されている。

- ③ ミッシェル・ジョリヴェ著、鳥取絹子訳『移民と現代フランス』（集英社新書、2003）p. 29以下。ちなみに4 %のフランス人がはっきり「人種差別主義者だ」と答えている。このフランス人にアルジェリア系フランス人が含まれていたとすると問題はかなり複雑となるはずであるが、明確にされることなく、なんとなく除外している様子である。
- ④ 東京大学教養講座、木村尚三郎編『生と死Ⅱ』（東大出版、1984）p. 3.
- ⑤ 同上書、pp. 3～14、木村尚三郎著『文明の成熟、そして死の問題—序論』
- ⑥ 主として17世紀、18世紀の生と死に関係する著作だけを掲げておく。
 Edgar Morin : L'homme et la mort (du Seuil, 1970)
 Philippe Ariès : Essais sur l'histoire de la mort en Occident du Moyen Age à nos jours (du Seuil, 1975)
 Michel Vovelle : Mourir autrefois (Gallimard/Julliard, 1978)
 Robert Favre : La mort au siècle des lumières (Presse universitaire de Lyon, 1978)
 Pierre Chaunu : La mort à Paris (Fayard, 1978)
- ⑦ Ariès の前掲書の翻訳、『死と歴史—西欧中世から現代へ』（みすず書房、1983）pp. 195～203参照。
- ⑧ Ariès .op, cit.. ; P. 160に、l'évacuation de la mort hors de la vie quotidienne.
- ⑨ 2002年3月18日に載ったBertrand Le Gendre 記者の analyse 記事「1962—2002, France et modernité（フランスと現代性）」参照。
- ⑩ セドリック・ミムス著、中島健訳『ひとが死ぬとき』（青土社、2001）p. 292 参照。
 ちなみに2000年にフランスでは3211件の移植手術が行なわれ、その内、328件が心臓移植であった。
- ⑪ 松浪信三郎著『死の思索』（岩波新書、1983）この書の[V]章「生まれるのも不条理、死ぬのも不条理」pp. 175—198 参照。
- ⑫ 同上書、p. 185.
- ⑬ 『世界の宗教』（自由国民社、2001）p. 13 高尾利数氏の文章中に引用されている。
- ⑭ 松浪信三郎著、前掲書より多少文章を削除して引用した。
- ⑮ 『聖書』（新共同訳）（日本聖書教会、1987）「コリントの信徒への手紙」pp. 371—372.
- ⑯ 『キリスト教大事典』（教文館、昭38）pp. 908—909.
- ⑰ 『聖書』p. 373.「復活の体^{からだ}」の項目。

- ⑮ <http://www.paris.fr/fr/vos-demarches/obsèques/crémation.htm> 及び
<http://www.gargl.net/lachaise/histoire/histoire-crémation.htm> 参照。
- ⑯ アルフォンス・デーケン著『死とどう向き合うか』（NHK 出版、1996）。
 デーケン氏によって日本でも死生学 *thanatologie* が定着してきている。「喪失の悲嘆」から立ち直るプロセスを12段階に分けて説いたのも同氏の功績であろう。
 フランスと日本の文献で参照したものを以下に1冊ずつ掲げる。
 Christophe Fauré : *Vivre le deuil au jour le jour* (Albin Michel, 1995)
 森省二著『死による別れの癒やし方—患者と家族の心のケア—』（丸善ライブラリー、1997）
- ⑰ 『Le Parisien』紙、2003年9月2日号参照。
- ⑱ 『Le Parisien』紙の記事は、同上の個所を含め、いずれも <http://www.leparisien.fr> からとったものである。以下も同様。
- ⑳ 『中央公論』1998年10月号、pp. 94～95。
 産経新聞パリ支局長、山口昌子氏が「パリの安楽死論争」というタイトルで論評ぬきで報告している。
- ㉑ *Le monde*、1998年9月24日号
Le plan Kouchner pour mieux accompagner la fin de la vie.
- ㉒ 「*Le Parisien*, jeudi 16 octobre 2003」参照、及び *Le Figaro* の2003年10月16日号も参照。
- ㉓ この項のニュースは *Le Parisien*, *Le Figaro* *Le Monde* 等あらゆる新聞を参照した。特に *Le Monde*、2003年9月26日、29日の記事は大きく扱っており、この問題、安楽死「*Euthanasie*」にかけるこの新聞の古くからの特別の関心を感じさせる。この点は、「尊厳死」のところでも扱われる。
- ㉔ 三井美奈著『安楽死のできる国』（新潮新書、2003、7月）。先のクシュネール大臣の「告白」は本書 p. 151 を参照した。オランダ誌「自由ネーデルラント」のインタビューで、「国境なき医師団」の一員として赴任したベトナムやレバノンで、死を目前にした患者に大量のモルヒネを注射して何度も安楽死させた経験を告白した。安楽死を非合法とするフランス国内では発言できなかったのであろうか。2004年11月26日の「*Le Monde*」は安楽死をめぐる法律制定の動きを伝えている。クシュネールの「病人の権利」を認める方向のようである。
- ㉕ *La Libération*、2002年12月9日号。

- ②⑧ Le Monde、2002年12月7日号の Paul Benkimoun 記者の記事より。
タイトルは「L'adieu de Mirelle Jospin à ceux qui «se battent pour la paix du corps»
- ②⑨ «Merci à vous : toutes et tous qui se battent pour la paix du corps en son Temps»
- ③⑩ Association pour le droit de mourir dans la dignité. (フランスの尊厳死協会) のパンフレット参照。(103, rue la Fayette 75481 Paris Cedex 10. Tél: 0142851222.) 協会は、各人が医者宛に尊厳ある死を迎えたい意志を表明しておくことをすすめることを、基本的な活動としている。
- ③⑪ 田代俊孝著『仏教とビハラー運動』（法蔵館、1999）pp. 133－134。なお日本においては、太田典礼が「日本安楽死協会」を立ち上げ（1976）、2年後に法制化を試みたが世論（野間宏ら）の反対で失敗した。1983年からは「日本尊厳死協会」と改名し現在に至っている。
- ③⑫ 朝日新聞（2003年1月3日）国王憲人氏の記事「前首相母自殺で安楽死論争」。
- ③⑬ http://www.religioscope.info/article_146.shtml
2003年4月にCSAと「La Vie」「Le Monde」の2紙（誌）の協力で実施されたフランス人の宗教調査。94年に67%であったカトリック信者はさらに62%に減少している。「無宗教」は23%から26%に増加。「体の復活」を信ずるものは4%である。
- ③⑭ 布施豊正著『死にたくなる人の深層心理』（はまの出版、2004、4月）第1章参照。
- ③⑮ 前掲書、p. 470. なお、最新の『キリスト教辞典』（岩波）p.468も参考にした。
- ③⑯ Louis Chauvel : La croissance du suicide et les problèmes de la société française après les Trente glorieuses.
(<http://louis.chauvel.free.fr/suicjnp.pdf>.)
L. ショヴェルは、失業と自殺（特に若者）の関連を指摘してはいるが、同時に人生に展望を開いていくことこそが問題の中心であると指摘することを忘れていない。
- ③⑰ <http://www.mammo.tv/column/mon/list.htm> 参照。
これは男性の自殺率であること、(日本の女性は14.1、フランスの女性は上位20位のリスト外である)、かつてハンガリーが上位を独占していたのに、リトアニア、ロシア、ベラルーシが高率（75.6、70.6、63.6）で上位を独占していることに注目させられる。社会変動こそが、大きな自殺の要因であろうか。

③⑧ 「Le Parisien」 2003.2.6.

〈Comment empêcher le suicide.〉の記事を参照。

③⑨ 布施豊正著、前掲書（注③④）

著者は30年以上にわたる自殺の研究をとおしてふたつのこと、「愛の必要性」と「信仰」が自殺の予防につながると確信しておられる。（第4章「生きる！自殺から立ち上がった人々」）こうした確信に満ちたことばに筆者も全く同感である。

※絵図 1

Crématorium（火葬場）

Architecte : Jean-Camille Formigé (1845-1926).

（建築家、ジャン・カミーユ・フォルミジェ）

Extérieur（外側）



※絵図 2

